

日本文学分野の授業（国文学・国語学）

1. 国文学・国語学教育の目標

国文学（日本文学）は、それぞれの作品に込められた「心情」への正しい理解、国語学（日本語学）は、様々な言語事象に対する科学的な理解を理念とし、最終目標となる。具体的には、文学においては、歴史・文化・民俗等の基礎的な理解の上に、文学史についての専門的見識、表現された形態（ジャンル）ごとの作品への理解力、テキスト操作と註釈能力を育て、同時に従来研究成果についての体系的な知見を得ることが具体的な目標になる。国語学においては、文字・音韻・語彙・文法等の分野について専門的見識を育て、研究史への理解に立って、言葉についての諸問題を自ら解決する方法を修得し、見識を育てることが目標となる。

2. 国文学・国語学教育の問題点

現代における急速な生活形態の変容が、文学作品や言語現象への理解をより困難にさせる状況が生じている。具体的には、季節感の喪失、伝統的風習・行事の変化もしくは消滅、自然との離反、敬語の簡素化や誤用の蔓延などである。このような社会全般の生活様式の変容と併せて、とりわけ、中学高校における古典の教育機会の減少が、学生の古典に対する興味や理解の希薄化につながり、さらには、日本語に対する興味・感心も希薄化しつつある。

3. 授業改善のためのIT活用の意義

特に古典分野では、学生の古典への学習意欲を高めるため、基礎知識である歴史・文化・民俗等の解説や素材をWebサイトに掲載し、学習教材として予習・復習に使用させるとともに、対面授業での討論にチャットを用いて、学生全員から発言させ、教室をプレゼンテーションの場として機能させる。このようにするために、マルチメディア機器・学内LANは不可欠な基盤環境である。また、他大学・他機関等と連携協力して、一大学では実現できない授業をネットワークを介して共同で実施したり、自大学にない授業を他大学からネットワークで受けたり、質疑応答などにe-Learningを実施するなど、情報技術（IT）の活用が欠かせなくなる。

国語学に関しては、語彙調査、語彙索引の作成、語彙の計量分析などにおいて、コンピュータによる分類・分析処理や画像・映像の導入で、学生に興味・関心・実感を持たせるとともに、素データから帰納法的に理論化していく科学的思考能力の修得や、他大学との教材の共同利用、合同授業でのコンピュータ、マルチメディア、ネットワークの活用が期待されている。

4. IT活用の課題

マルチメディアとしての情報機器を駆使して、授業改善するためには、以下の点について解決することが必要である。

（1）教育支援体制の整備

大学イントラネットが整備され、潤沢に情報機器やAV施設が配置されるだけでは不十分であり、教員の具体的な教材作成や運用に適切な助言と技術的支援を行えるシステムエンジニアと、授業進行時に教室における複数のティーチング・アシスタントの存在が不可欠である。ティーチングアシスタントについては、院生や上級生の採用により大学にある種の活性を与えることにもなるが、ティーチ

ングアシスタントやスチューデントアシスタントをスタッフとして擁する「教育支援センター」などの組織が構築整備される必要がある。

(2) 教育業績評価制度の制定

マルチメディア教材の作成、ホームページの維持・管理、学生とのメール交換、共同授業の開発には、これまでの授業では考えられなかったほどの労力が要求される。そのため、従来の伝統的な教育研究業績の評価から、新しい時代の授業展開に対応した教員評価の基準作りが要請される。それは、情報機器の活用能力というレベルではなく、授業改善のための教育指導能力として教員の評価全体を見直すものであることは言うまでもない。

(3) 著作権の管理・運用原則の確立

マルチメディア教材の作成と活用で配慮しなければならない問題として、著作権への対応がある。

教員・学生がマルチメディア教材を作成あるいは活用しやすいように、著作権の管理や運用に関する基本的考え方と具体的なガイドラインを確立する必要がある。著作権問題は、教員や学生の「良識的判断」では処理しきれない場合が多く、日常的に遭遇する事態といっても過言ではない。文化庁あるいは国文学研究資料館などの共同利用施設や関係団体からの著作権処理に関する問題提起と解決方策の提案が待たれるところであり、私立大学情報教育協会でも検討中である。

5. ITを活用した授業モデルの設定

(1) 国文学（日本文学）

文学研究の基礎としての「テキスト処理」と「変体仮名・古筆」、ネットワーク共同授業としての「世阿弥の能楽論」の授業モデルを紹介することにした。

「テキスト処理」の授業では、汎用性の高い市販のエディターやワープロソフト、表計算やデータベースソフトの活用例を示すことで、テキストの扱い方について授業の範囲にとどまらない、研究への応用に情報機器を活用しうる授業のモデルとした。

「変体仮名・古筆」の授業では、学生参加型の授業を目指して、提案者のホームページを活用しながら、基礎的な知識を習得し、古典文学作品の原典に対する関心を培う授業のモデルである。

「世阿弥の能楽論」は、リアルタイムの共同授業の提案でもある。個々の大学で完結していた従来のカリキュラム体系が、情報機器の進展によって変容していくための積極的な方向性を提案する授業モデルである。

(2) 国語学（日本語学）

国語学において、情報機器が授業にもっとも有効に活用され、かつ教材の比較的少ない語彙の分野を採り上げた。「語彙索引」・「語彙調査」・「語彙分析」という三つのモデル授業を半期分の授業時数となるように配置し、総合的に「語彙」を理解する授業を構成することにした。さらに、語彙研究は計数的処理に関わる場合が多く、様々な授業展開の可能性があるので、マルチメディア活用授業の展開が期待できる。その意味で、共同研究や共同授業の可能性も強くあると考え、他の授業とリンクした授業の一例も紹介する。

次に、授業モデルの詳細を紹介する。

IT 授業モデルの紹介

事例 1 . テキスト処理入門

1 . 授業のねらい

この授業は、日本文学の研究の基礎となるテキストの扱い方について、基本的な知見を得ることと、情報機器を活用して、文章構成処理能力とデータベース処理能力、資料・研究文献の収集能力を培うことを目的とする。

2 . シラバス

2年生を対象とし、教室での講義と実技自習とする。パソコンを活用する時間については、すべての学生に実習用パソコンが用意されていること、ティーチング・アシスタントが学生数に応じた適当数が割り当てられることが必要。評価は、提出物として、2時間に1回程度のレポートを課し、評価する。

①授業計画の説明	
②写本と異本	原本のテキストが積極的な改編や、誤写などによって異文を生じる過程を確認する。(普通教室)
③校本と索引 その1	『校本枕冊子』・『源氏物語大成 校異篇』という2種の校本を取り上げ、異本と系統についての基礎的知見を学ぶ。(普通教室)
④校本と索引 その2	書物の形で出版された各種の索引を探り上げ、比較検討を行い、索引の現状やそれぞれの特色について学ぶ。(普通教室)
⑤索引作成の問題点	機械的な作業に思われがちな「索引」作成が、いかに深い解釈力と文法的大系との関わりの中で語の認定が必要であるかということを確認する。(普通教室)
⑥注釈 その1	古注と近代の注の比較、同一作品の同一部分に施された注釈の比較などの実例を示し、注釈の現状についての知見を得る。(普通教室)
⑦注釈 その2	前時を受け、「すぐれた」注と「至らない」注の比較検討を行う。(普通教室)
⑧注釈における用例の意味	「すぐれた」注に至るためには、用例というものがいかに重要であるかということについて、実例に則して学習する。(普通教室)
⑨インターネットによるテキストの獲得	Webページの活用によりどのようなテキストの入手が可能か検討し、実習する。(情報機器設置教室)
⑩用例一覧の作成	ワープロソフトやエディターの検索機能の活用による用例の抽出と一覧の作成。注釈への応用を学ぶ。(情報機器設置教室)
⑪用例一覧の活用	前時間に作成した用例一覧から、どのようなことをまとめることができるか、見解発表と意見交換をフリートークを基本にして実行する。(普通教室)
⑫ブレンテキストからデータベースへ	第⑩時限目の授業の後半部分での、用例の抽出を表計算やデータベースソフトによって実習する。(情報機器設置教室)
⑬テキスト操作の実例と実習	中野洋著『パソコンによる日本語研究入門』に示された、テキスト操作の各種ソフトの紹介とデモンストレーションを行い、専門的なテキスト操作の概要を学習する。(情報機器設置教室)
⑭ホームページのデータベース活用	国文学研究資料館・東京大学史料編纂所・中国古典籍データベースのデータベースの活用の方法と実習。(情報機器設置教室)
⑮研究論文の入手	国文学研究資料館のデータベースへのアクセスの実習。(情報機器設置教室)

[参考]

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) 国文学研究資料館 (<http://www.nijl.ac.jp/index.html>)

東京大学史料編纂所 (<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>)

中国古典籍データベース (<http://hyena.hle.niigata-u.ac.jp/files/dbase.html>)

3. IT活用授業の内容

ここでは、シラバスの第10時間目(90分)「用例一覧の作成」を例に、授業のイメージを紹介する。

(5分)	授業のねらいの説明の後、古今集のテキストファイルをワープロかエディターで表示させる。(古今集テキストファイルは、学内ネットワーク上の共通ドライブに収納)
(5分)	ワープロソフトかエディターで、別に新規作成画面を表示する。古今集のファイルと何も書かれていない新規作成画面の両方が見えるようにする。
(5分)	ワープロソフトかエディターの「検索」機能を使って、古今集のファイルで、例えば「ふるさと」という語の検索を実行させる。
(35分)	検索が該当語を支持するたびごとに、「ふるさと」を含む和歌や詞書きを範囲指定する。その範囲指定部分をコピーする。新規作成画面に移ってコピーした部分を貼り付ける。これを、古今集の最終歌まで繰り返す。
(15分)	新規作成画面に、古今集における「ふるさと」の用例一覧が作成されたことを確認する。検索語である「ふるさと」を強調表示する工夫をさせ、プリントアウトさせる。
(20分)	用例一覧を見ながら、「古今集における『ふるさと』」というレポートをまとめるとすれば、どのようにまとめられるかを考えさせる。
(5分)	図書館等での古今集の注釈書による、用例一覧の深い理解を宿題として課す。

4. 授業の効果と今後の課題

大量なデータの収集とその並べ替えや検索という、情報機器の最も得意とする分野の実習であり、手作業や経験・記憶の積み重ねによる作業と大幅な違いのあることが実感される。情報機器の活用が極めて有効であることの確信を学生が抱き、その後の卒業論文の作成などで自らの研究への積極的な応用が見られ、かつ成果を上げる実例が確認される。

今後の課題としては、扱う材料であるテキストがどのような処理過程を経たものであるのか、つまり、テキストクリティーク上の基本的な見識を育てることがおろそかになりがち傾向がある。教員が対応不可能な機械やネットワーク上のトラブルへの対応のために、ティーチング・アシスタントやチューデントアシスタントが教室に配置されていることが必要である。

機械操作がすべてという「信仰」が学生間に生まれがちで、非効率ではあるが、手作業によって確実に獲得できた「センス」というものの大切さをどのように自覚させ、磨いていくかを考える必要がある。

事例2. Webサイトを活用した日本文学基礎演習「変体仮名・古筆」

1. 授業のねらい

学生参加型の、「わかる」授業を心がけて、コンピュータやホームページを活用しながら、「変体仮名・古筆」に関する基礎的な知識を習得し、日本古典文学作品の原典に対する関心を培う。具体的な学習目標としては、以下の諸点が達成できるようにする。

日本古典文学作品の伝本は、写本や版本などによって今日に伝存することを理解する。

変体仮名およびその字母について理解を深める。

影印本、古筆、写本、版本などの本文を、正確に読むことができるようにする。

諸本を読み比べて、本文異同の実際や本文転化の事例を知る。

影印本や写本を解読して、本文解釈の実際を学ぶ。

2. シラバス

(1) 学科名・対象など

日本文学基礎演習（通年）は、一講時90分、日本文学科1年次生を対象にした必修科目である。授業は受講者数を20人程度に抑えたクラス制で、専任教員が各自の方法・テーマで各々1クラスを担当する。

(2) 授業計画

1年次生が対象なので、当初数時間はパソコンの操作に慣れる授業を行い、次いで「いろは歌（第4回）」「変体仮名を学ぶ（第5～8回）」「源氏物語の伝本・注釈書（第9回）」等について学ぶ。そして、ホームページ（HP）で公開されている大正大学所蔵の源氏物語の写本を読む演習（第10～12回）を繰り返して、次項のモデル授業（第13回）へ進む。なお、第13回以降の授業計画は、次の通りである。

第13～14回	変体仮名・源氏物語の諸本を読む1～4	第21回	古筆切を読む
第17回	伊勢物語概説	第24回	枕草子概説
第18・19回	写本「伊勢物語」を読む1～2	第25・26回	版本「枕草子春曙抄」を読む1～2
第20回	三十六人歌集概説	第27回	版本「源氏物語御月抄」を読む
第21・22回	版本「三十六人集」を読む1～2	第28回	まとめ
		第29・30回	予備

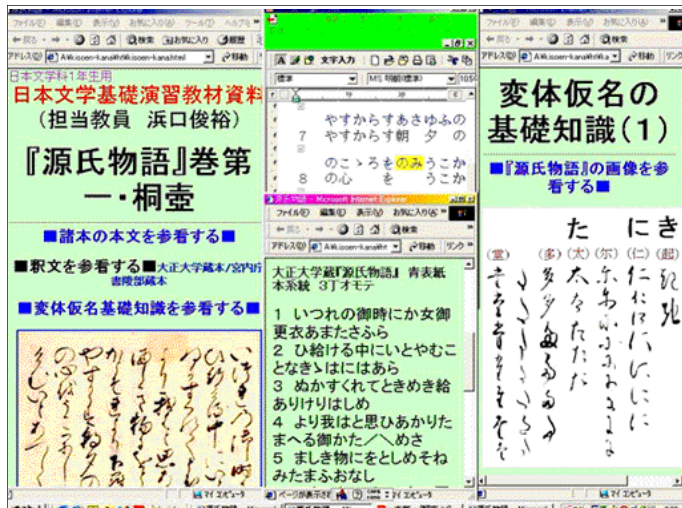
3. 授業内容

ここでは、日本文学基礎演習第13回の「変体仮名・源氏物語の諸本を読む（1）」を例に、授業のイメージを紹介する。本時では、源氏物語の伝本を見比べて、本文の異同や本文転化の事例を理解させ、併せて本文の解釈という問題について教授する。

(分)	授 業 内 容	教 具
0	導入 本時のテーマなどを説明。	
5	HP 大正大学付属図書館(http://www.lib.tnu.ac.jp/genji/)にアクセスし、所蔵の写本源氏物語桐葉巻4丁表の本文をプリントアウトさせる。	HP
10	演習 ① 1.上記の本文をWord文書に転写させる。 2.教員のHP収載の転写本文と照合させて、誤読の箇所を赤字で訂正させる。	Word文書 HP
25	解説 教員のHP収載の「変体仮名の基礎知識」を見せ、字の複用や留意点などを解説。	HP
30	解説 宮内庁書陵部蔵青表紙本源氏物語桐葉巻1丁表の本文を配布し、同本の解説を加える。	プリント
40	演習 ② 1.宮内庁書陵部蔵青表紙本源氏物語桐葉巻1丁表の本文を演習①-1の上段に青文字で転写させる。 2.教員のHP収載の転写本文と照合させて、誤読の箇所を赤字で訂正させる。 質問 疑問点などに応じる。	HP
65	演習 ③ 1.演習①-1および演習②-1より異文箇所を黄色でマーキングさせる。 2.対立異文「心を」と「こゝろをのみ」は、本文解釈の観点から何れが妥当か、意見発表させる。 3.その他、気づいた事柄があれば指摘させる。	Word文書
80	解説 1.演習③に関し、教員の見解を示す。	プリント
85	2.参考文献の紹介『源氏物語大成 校異編』	
参考書	『変体仮名』(新井社・昭63)	

次ページの画像は、上記モデル授業専用のホームページに収載している教材を適宜開いてみたシミュレーション画面であり、現在公開しているホームページには、これらの教材を掲載していないことを付記しておく。従来型の授業では、写本の本文を提示するにしても白黒のコピーで配布されるのが普通であろう。しかし、ホームページを作成し活用すれば、画面左のように着色された原本の姿に近い画像を学生に提供することも可能であるし、画面中央の翻字本文なども学生の演習の進捗状況に応じて適宜活用させることができる。

画面右の「変体仮名の基礎知識（1）」のような教材も、特定の文字をマウスで指示しながら字形の特色や判読するときの留意点などについての解説を、学生全員に対して一斉に行うことができる。



このように変体仮名や写本を読むような地味な演習科目であっても、マルチメディア型の授業では、学生数や教室の大小に関わらず、学生に興味を持たせて効果的に運営することが可能である。

4. 授業での効果と問題点

(1) 効果

マルチメディア型授業を実施した場合の主な教育効果は、

ホームページに教材を掲載するので随時学習が可能となる。

教材資料の印刷や配布が省略できる。

カラー画像や映像の導入によって、学習内容の理解を助け、深めることができる。

学生個々人の学習到達度が確認できる。

授業にメリハリがつき、学生も集中力を高めて意欲的に臨むことができる。

学生に学習成果の達成感を自覚させることができる。

(2) 授業過程での問題点

入学間もない頃は、コンピュータの操作に未熟な学生が多く、パスワードの忘失、データ保存先の混乱、フリーズ等々、種々のアクシデントが生じてその対応に時間を割かれることも多い。

学生がコンピュータの操作に馴れてくると、演習に必要な知識や情報の蒐集を専らインターネットに委ねるようになり、注釈書や辞書などの専門書に目を向けなくなる弊害が生じた。

5. 今後の課題

Webサイトを利用してきめ細かな授業を展開をするには、デジタル教材の作成に多大な時間を割かざるを得ず、現在の教育への支援体制では、教員の負担は従来型の授業とは比較にならない程大きい。

授業に有効な画像資料等が多数現存するにも関わらず、所蔵権・著作権等の問題が介在してくるために、効果的な教材資料の提示が至難である。画像等を蒐集・提供する機関を設立し、教材の開発・共同利用を可能にする環境づくりを急ぐ必要がある。

事例3. ネットワーク上の共同授業シミュレーション「世阿弥の能楽論」

1. 授業のねらい

「世阿弥の能楽論」の授業は、能楽に関する資料を豊富に所蔵する複数の研究機関が協力しあいな

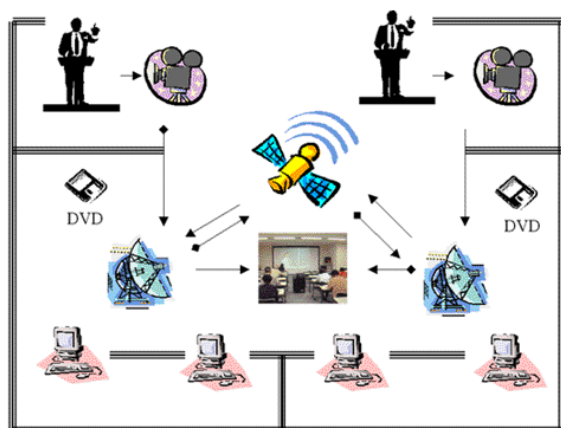
がら、より多くの学生を古典芸能の世界に触れさせ、その魅力を理解させる。その結果1人でも多くの学生が能楽堂を訪れるようになってくれればよい。

2. 授業の概要

「世阿弥の能楽論」というタイトルで、二人の講師による大学間の共同授業を構想してみた。これを実際に具体化するには、大学間の協定が必要になる。所属大学の物心両面の支援なくして、こうした授業を実現することは不可能だからである。

授業を行う場合の設備条件は、各大学に授業に利用可能なネットワークが構築されていること、衛星放送の双方向通信施設があること、パソコンを含むOA機器やAV機器が完備され、プロジェクターとスピーカが存在し、OHC（教材提示装置）もあること、四季を通じて空調可能な設備があること、なお、オン・デマンド方式の授業の場合は、授業内容をあらかじめ撮影しておく必要がある。

対面授業の場合は、教室を使用し、授業風景をリアルタイムで撮影することになる。コンピュータールームを教室に使用するのが原則であるが、オン・デマンド方式の場合は、自宅からのアクセスも可能である。双方向の衛星通信を使う場合は、教室に通信設備とプロジェクターがあれば、質問はマイクで行うこともできるが、電子掲示板（BBS）への書き込みを前提とする場合は、パソコン教室が必須となる。（下記概念図を参照）



概念図

A大学とB大学の授業がそれぞれ撮影・送信され、学生は教室で受講。DVDなどに記録すれば、インターネット配信も可能で、その場合はオン・デマンド型授業になる。

3. シラバス

「世阿弥の能楽論」の半期分のシラバスを示す。

1週	世阿弥の発見と能楽史研究への影響（世阿弥能楽論の発見とその評価、世阿弥能楽論の発見により、能楽史研究がどのように展開したか）→次ページシナリオ参照
2週	世阿弥能楽論の世界（世阿弥の全著作21種をリストアップし、能楽論研究の歴史を通覧する）
3週	初期『花伝』と世阿弥（年末稽古条々・物学条々・問答条々を読む。一部を摘録して解説。主要伝本の写真を提示する。以下同じ）
4週	『花伝』七編と世阿弥（第六花修・第七別組口伝・古本別組口伝を読む）。
5週	『風姿花伝』と世阿弥（序・神儀・奥義を読む）
6週	幽玄能をめざして（『花説』を読む）
7週	幽玄論の完成（『至花道』を読む）
8週	理想的な演技とは（『二曲三体人形図』を読む）
9週	六百年の遺産―世阿弥の新作能（『三道』を読む）
10週	カリキュラムの完成（『九段』を読む）

11週	世阿弥の音楽論（『音曲口伝』を読む）
12週	音楽と能楽（『風曲集』『五音曲集』を読む）
13週	音楽劇の統合理念（『習道書』を読む）
14週	世阿弥という人（『申楽談儀』を読む）→下記シナリオ参照。
15週	予備日

4. 授業展開と授業シナリオ（2例）

90分授業を前提に2人の教員が共同で一つの授業を運営する。

授業の1段落を原則15分とし、一方の教員が講義を行う。各段落の間に5分のコミュニケーションタイムを挿入、そこでは学生が授業用に限定公開されたBBSに、自由な書き込みを行う。最後の15分は「まとめ5分」と「コミュニケーションタイム10分」。なお、一方が講義をしている間、一方の教員は、学生から掲示板に書き込まれた内容を見ることとする。

使用教材は、原則としてすべてデジタル化されていること。ただし、図表やテキストの類は、当該授業用のホームページに事前に掲示しておき、各学生はそこにアクセスして、あらかじめ各自でダウンロードしておくこと。

学生によるBBSへの書き込みは、翌週の授業の2日前まで可能とする。それより後まで書き込みを許可すると、教員のフォローが困難になる。

教員は、必ずしも書き込みをする必要はないが、教員に対する質問には必ず答えるようにする。また、BBS上での発言は、私的な内容に亘るものは厳禁し、授業に関連する話題のみに限定することを各学生に徹底させる。BBSの冒頭発言でその旨を宣言すればよい。

授業の最後では、必ず各教員から、何らかのクイズの出題もしくは問題提起が行われる。このクイズには、各自で授業の2日前までに回答する。例えば、シナリオAでは、「世阿弥の発見によって、日本の文化には何がもたらされたか」、「ここからどのような研究が可能になったと考えるか」、シナリオBでは、『申楽談儀』の書物としての魅力とは、「世阿弥の人物像」などの質問があり得よう。

授業のシナリオA（第1回・世阿弥の発見と能楽史研究への影響）

時間進行	教員A	教材	教員B	教材	学 生
9:00	導入世阿弥の発見近代における世阿弥発見の経緯	演博蔵吉田東伍自筆原稿。年表掲示	待機		教員Aの授業をプロジェクトで見える。大学Aでは対面授業
9:15	書き込み中止宣言				教員Aへの質問と意見交換
9:20	BBSへの学生の書き込みを参照。適宜に返事を用意する。		世阿弥の評価野上豊一郎の紹介とその影響能勢朝次の研究	野上博士収集資料の一覧。文献目録	教員Bの授業をプロジェクトで見える。大学Bは対面。以下同様。
9:35			書き込み中止宣言		教員Bへの質問と意見交換
9:40	『花伝』の読解例「問答条々」第一条・申楽成功の秘訣をどう読むか。	本文提示。能舞台図の写真提示。本文掲示	学生の書き込みを参照		
9:55	書き込み中止宣言				教員Aへの質問と意見交換
10:00	学生の書き込み参照		『花伝』の読解が能楽の歴史に直接及ぼす影響例。猿楽の古い形態。	通小町・海士の写真。作品構成表掲示。	
10:15	問題の整理と提起意見交換		問題の整理と提起意見交換		教員Bへの質問意見交換

授業のシナリオB（第14回・世阿弥という人—『申楽談儀』を読む）

時間進行	教員A	教 材	教員B	教 材	学 生
9:00	導入申楽談儀の芸人評に見る世阿弥の人情と芸風	本文提示。関連曲の写真提示。			教員Aの授業をプロジェクトで見える。大学Aでは初年度授業
9:15					教員Aへの質問と意見交換
9:15	書き込み中止宣言				
9:20					
9:20	学生の書き込みを参照。		申楽談儀の魅力芸術中に見える世阿弥の名言	「文章の法は」「しめてよきにつくべし」等	教員Bの授業をプロジェクトで見える。大学Bは初年度。以下同様。
9:35					教員Bへの質問と意見交換
9:35					
9:40			書き込み中止宣言		
9:40	申楽談儀の藝人評世阿弥死見の端緒となった芸談	申楽談儀話本の学生書き込みを参照			
9:55		写真申楽談儀の内容一覧			
9:55	書き込み中止宣言				教員Aへの質問と意見交換
10:00					
10:00	学生の書き込み参照		晩年の世阿弥一生と転落に見る世阿弥の人権性	「後の世に知る人あるまじ」「書道書」・「建内記+附録での立合談義資料」「夢路一紙」・「金鳥書」・「世渡状」	
10:15					
10:15	問題の整理と提起意見交換		問題の整理と提起意見交換		教員Bへの質問意見交換
10:30					

5. ネットワーク授業の効果と課題

(1) 授業の効果

ネットワークを用いた授業やデジタル教材・Webサイト上のデータベースなどを利用した授業は、準備が極めて大変であり、教員の負担は、従来型の対面授業に比して極端に増大する。これに対応することを目的の一つとして、他大学の教員との共同授業を想定してみた。ただし、このようなことが可能になるためには、共同で授業を行うに足る授業内容が求められる。今回の場合は、古典芸能の普及という共通目的を掲げ、互いに関連資料の豊富な研究機関のバックアップを受けることができるという点に、大きなメリットを見出した。

授業方式としては、教室ではなく、スタジオで授業内容をあらかじめ撮影し、それをネットワーク配信するオン・デマンド方式と、教室での授業風景を撮影し、それをリアルタイムで衛星通信で配信する方式との、二通りが考えられる。

*前者の場合、学生は任意の時間にオープン教育用に閲覧を限定されたホームページにアクセスし、授業を受講できるので、一種の課外授業もしくは自習の形で勉強を進めることができる。

*後者の場合は、自分の大学の授業に参加しつつ、その中で他大学の授業を衛星放送で聴講する形になる。

教室での質問はマイクを使用すれば配信先の教室でも聞き取ることができるし、一定時間帯を書き込み用の時間として設定して、質問等は定められた掲示板に書き込むことも考えられる（シナリオではこの形を想定した）。担当教員1名対学生という従来型授業に対し、双方向通信を利用した開放的でダイナミックな授業が可能になろう。テーマ次第では、この方式が教育効果を高めてくれる可能性が大きい。いずれの場合も、期末の課題はメールによるレポート提出になるが、ホームページ上でアンケート形式の試験を行うことも不可能ではあるまい。

ただし、このような授業を準備する教員の負担はやはり大きなものにならざるを得ない。したがって対面授業は初年度のみとし、次年度以降はオン・デマンド方式に切り替えるなどの工夫が必要とな

ろう。同じ内容の授業を毎年繰り返す形になるが、十分に作り込みをしておけば、「同じノートを毎年使う」というマンネリ授業とは異質の内容になることは確実である。こうしてパッケージ化された授業は、以後、様々な再利用が可能となるであろう。

(2) 授業実施に伴う課題

このようなプランを現実化するためには、教室内で機器操作を補助するアシスタント、授業内容を撮影し教材作成を支援するスタッフの配置や、ハードウェア整備など、所属研究機関（大学）の全面的な支援体制が必要であるが、現実的には難しい面がある。共同授業のような複雑な手順を要する大学間ネットワークを効果的に構築・運用するためには、大学間でハードウェアを同一規格化・平均化することが不可欠であろうと思われる。それによって環境整備のコストを低減させれば、より多くの知の結集に貢献することにもなる。

また、このような授業環境の構築を目指して、複数の大学が何らかのプロジェクトを共同で計画し、公的予算の補助を獲得していくことも大切かと思われる。

事例4 大学間ネットワーク共同授業（国語学：語彙調査）

1. 語彙授業のねらい

語彙調査の目的・方法について関心を持たせ、ネットワークで広く学ばせる。

実際に文脈付き索引Kwicを作成し、その利用を考えさせる。

(Keywords in Context)：自立語に文脈を付したもの

MS-DOSのコマンドを使うことにより、パソコン操作の基本を学ばせる。

Kwicにより、各自が作成した文章の用語の特徴を調べさせる。

レポートをパソコンで作成させる。

2. 当指導計画のメディア教育的価値

語彙調査にパソコンが利用できることを実際に理解させること。

パソコン操作により、文脈付き語彙索引を作成させること。

市販のソフトを単に利用するだけでなく、自分の目的に応じたパソコン利用ができることを知らせること。

ワープロのコマンドラインを理解させ、コマンド・パラメータ等の意味を理解させること。

3. シラバス

主として古辞書と仮名遣い書の内容を学びながら、国語の理法、歴史について学習させる。

年間（通年）の内容： 文字

音韻（アクセント）

語彙（8授業時間）

文法

ここでは、の「語彙」を授業モデルの対象とする。科目名は、「語彙研究入門」。

以下に示すシラバスは、国語学の語彙調査、語彙索引、語彙分析の授業をネットワークを介して共同で分担することを想定している。したがって、語彙調査8時間、語彙分析4時間、語彙分析4時間

の構成で、3大学で分担するものとした。

授業計画 (90分/週 8週)

第1時	語彙調査の目的(語彙論の内容と今後の作業内容を理解させる。)<通常教室>
第2時	実習の概要とJgawkの基礎事項を理解させる。<以下パソコン教室>
第3時	ワープロで文章を作成させる。
第4時	ワープロで文章を完成させる。
第5時	デリミタ等を挿入させ、次にJgawkのコマンドを入力し、Kwicを完成させる。
第6時	Jgawkのコマンドを入力させ、レポートの作成について方針を立てさせる。
第7時	ワープロ及びデータベース・ソフトを使い、語彙に関するレポート(一次原稿)を作成させる。
第8時	語彙に関するレポートを完成させる。

4. 授業の運営

(1) 毎時間の事前指導

ホームページ(URL <http://www.ne.jp/asahi/ngm/smk/>)に次週の内容予告を掲載し、事前の宿題を学習させておく。

(2) 事前の宿題

完成した索引により、語彙についてのレポート執筆の方針を考える。

で考えた語彙についてのレポートのねらい、またはレポートの内容を200字～300字に纏めて提出する。提出形式はなるべくワープロでA4用紙使用。手書きなら原稿用紙でもよい。

(3) 指導上の留意点

授業の目標を明確に理解させる。

ワープロ操作の習熟度にまだ個人差があるが、ワープロ操作の評価ではないことを徹底させる。

コマンド・ラインの実際を操作の中で理解させ、コマンド、パラメータ等の理解をさせる。

ホームページ(HP)を見ることで、問題把握の視点を拡大させる。

毎週、授業用HPで、次の授業予告と課題(宿題)とを理解させる。

5. マルチメディア活用授業の内容

ここでは、「第7時」の「レポートの作成方針により、ワープロとデータベースソフトを使い、レポート(一次原稿)を作成させる。」を例に、授業のイメージを紹介する。

分)	授業内容	学習活動用語	教材・用具
5	1前時の反省 2事前の宿題について発表させる。 指名	短文章で提出 1・2例	FDでよい 【参考1】
15	3本誌の「和歌集の文脈つき語彙索引」の作成」授業の第2回の授業内容・風景を観察させる。	「単語認定」 HPにアクセス	【参考2】 プリント資料
25	4Kwicをデータベースに変換させる。 横 五郎「ファイルを読み込んで表を作成する。」の手順を学ばせる。 ※データベースがない場合は、ワープロの検索機能でも、同様のことができることを知らせる。	データベースの使用に馴れる。 「新規作成」「項目」「検索」	データベース 五郎 ワープロソフト
40	5ワープロでレポートを書かせる。 中心点のみをあらあ書き、引用部分はデータベースからコピーすること等。 6A4・1～2枚の文章を作成させる。	データベース・ソフトの起動 絞り込み検索文字列 「編集機能」「コピー」	ワープロソフト データベース・ソフト
85	7他のレポートにも応用できることを知らせ、次の予告。		

「授業の内容」欄の【参考】について、実際の提出例（男女学生各1）と授業の動画作成の問題点とを以下に掲げる。

【参考1】＜宿題提出事例＞

当たり前なことだが、何百年前も昔の日本人が使っていた言葉と現在のわたし達が使っている言葉とでは大きく異なっているだろう。まして、話し言葉ともなればなおさらであろう。そこで、約五百年前の言葉と今の言葉を比べてみたい。とは言え、それでは漠然としすぎているため、もう少し範囲を狭めてみることにした。まず、今回わたしが作成した文章を古辞書の乾坤・時候・神祇...等の項目によって分類する。その結果、どの項目に属する語の割合が多かったか、及び少なかったか、また、どの項目にも当てはまらない言葉があったかということを調べる。これらを調べることによって五百年前の言葉から今の言葉への変遷が見えてくるのではないかと思う。

完成した索引を見ると、私の使用した語で目立って多く使用していたのが「(～で)アル」「(～して)イル」「(～と)オモウ」の三つであった。これらは皆文末に付く語である。私はこの中で、特に「オモウ」という語に注目してみたい。

「オモウ」は動詞であるが、動詞の中でも動きとして目に見えるものではない。同じ性質のもので、私は「カンガエル」という語も使用していた。こういった語彙を文末に付けることによって、こういった感情が表されたり、文章にどのような意味を付け加えることになるのか考えてみたい。(原文のまま)

【参考2】 他の授業の参照方法

DVまたはDVDカメラにより授業内容・風景を撮影する。

DV端子とIEEE 1394(i.LINK)とを接続し、編集ソフトにより編集。

映像（ムービー）をWeb上にポストする。（HTMLファイルとして電子メールに添付。）

または、映像（ムービー）をH P にLINKして置く。

または、映像（ムービー）をCD-RWドライブによりCD-RWに保存。

6. 授業の効果と今後の課題

(1) 授業の効果

現在は、ワープロ操作に熟達した学生がいる一方で、少数であるが初めてパソコンを扱う学生もいる。両者の進度の差異が年々大きくなるので、授業計画は中程度に合わせる。また、習熟度の異なる学生の相互交流がなされて、相互学習の効果が大きい。なお、最終レポートまでの完成率は、例年、約90%である。

Jgawkのプログラムを学び、パソコンの基本事項を修得する。

ワープロソフトの他、データベース、インターネット等を目的に即応して使えるようになる。

語彙研究の意義を実践的に理解する。

(2) 今後の課題

大学間ネットワーク共同授業のシステムに国語学・日本語学の講義をどのように組み入れるか。また、マルチメディアの活用をどのように取り入れたらよいか。

JgawkはMS-DOSを使用するが、Windowsでこれに変わり得るソフトがあるか。

事例5 ．大学間ネットワーク共同授業(国語学：語彙総索引作成)

1．授業のねらい

歌番号のついた和歌集を対象に、文脈（各歌の全文）つきの語彙総索引を作成する。古典文学の語彙総索引は、語学研究にも文学研究にも有用なものなので、多くの作品について、手書きカードを用いて多大の労力・時間をかけて作られてきた。

この演習では、単純な作業の繰返しをパソコンにやらせることにより、手間をあまりかけずに語彙総索引を作る方法を体験する。参加者が10人～20人なら、300首程度の歌集を分担して処理できるだろう。なお、和歌の各句索引なら、この方法を用いれば、かなり容易に作ることができる。

2．語彙総索引作成の意義

短歌1首が20語近くの単語からなるため、短歌1首につきカードが20枚必要で、もし、1000首からなる和歌集を対象に手作業で索引を作ると、全体で2万枚のカードを作って分類しなければならない。使う立場からすると索引には所在（この場合は歌番号）だけでなく文脈が付いているのが理想だが、作る立場からすると同じ歌を20回もカードに書かなければならず、実現は容易ではない。

実際の作業の大変さは、既存の総索引の後書きなどに記されていることがあるから、それを学生に読ませて先人の苦勞を偲ばせるのは意味があるであろう。

3．授業の前提条件

授業時間：90分×4回

参加人員：20人以下

参加資格：2年生以上、ワープロ入力ができること

教室の環境：各学生にパソコン（ワープロまたはエディター）1台

4．授業の内容

【第1回：本文を確定する】

テキストファイル形式で入力した歌集の本文（今、KASYU.TXTとする）をあらかじめ用意し、学生の人数分だけプリントアウトしておく。詞書・作者・歌ごとに改行し、行の頭に巻数・歌番号と、K（詞書）・H（作者）・U（歌）の別をあらかじめ付けておく（勅撰集の場合、巻数は2桁、歌番号は4桁）。

の本文を学生全員に配り、原本（写真）と照合して、ミスを修正し確定する（作品が古典の場合は、変体仮名が読めることが前提）。ここで間違いが残ると後に大きく響くので、慎重に行う。変更部分は教員がとりまとめてファイルを修正し、KASYU2.TXTとする。

【第2回：単語に区切る】

前回のファイル（KASYU2.TXT）を学生の人数分に分割し、KASYU2A.TXT、KASYU2B.TXT、……としておく。

学生各自が自分の分担分について、見やすくなるよう、歌の句の切れ目に全角スペースを入れる。

[実例] (KASYU2A.TXT)

第 0 1 巻0001 K ふるとしにはるたちける日よめる

第 0 1 巻0001 H ありはらのもとかた

第 0 1 巻0001 U としのうちに はるはきにけり ひとゝせを こそとやいはむ ことしとやいはむ

各自、注釈書を手元に置き随時参照しながら、歌と詞書とを、学校文法に従って単語に区切り、区切り目に半角スラッシュ (/) を入れる。複合語の認定などで悩むことが多いが、なるべく長めにしておいて、各構成要素について後から空見出しを立てるほうが良い。

[実例] (KASYU2A.TXT)

第 0 1 巻0001 K /ふるとし/に/はる/たち/ける/日/よめ/る/

第 0 1 巻0001 H /ありはらのもとかた/

第 0 1 巻0001 U /とし/の/うち/に/ /はる/は/き/に/けり/ /ひとゝせ/を/ /こそ/と/や/い/は/む/ /ことし/と/や/い/は/む/

作業の終わったファイルは教員の下に集めてチェックする。かなりの誤りや不統一があるので、次回までに教員が修正を加え、KASYU3A.TXT、KASYU3B.TXT、.....とする。(本当は、KASYU2A.TXT、.....をすべてプリントアウトして全員に配って、教室でミス指摘させるべきだが、そうすると非常に時間がかかる。)

【第3回：見出し語を立てる】

修正を加えたファイル (KASYU3A.TXT、KASYU3B.TXT、.....) を対象に作業をする。

索引の見出し語を行頭に立て (漢字は仮名に直し必要な濁点を加える) 文脈中の見出し語該当語を《 》でくくる。この作業は、もちろん人の手によってもできるが、これを専用ソフトを使ってパソコンに処理させる。フリーソフトの MIDASI.EXE (安田俊之 氏 作成、MS-DOS上で動く。本書付録CD-ROMに所収。) を利用。修正済みの歌集のファイル (KASYU3A.TXT、KASYU3B.TXT、.....) を教員があらかじめMIDASI.EXEで処理しておく。

[処理の実例]

A:¥MIDASI < KASYU3A.TXT > KASYU4A.TXT

ふるとし[] /第 0 1 巻0001 K /《ふるとし》/に/はる/たち/ける/日/よめ/る/

に[] /第 0 1 巻0001 K /ふるとし/《に》/はる/たち/ける/日/よめ/る/

はる[] /第 0 1 巻0001 K /ふるとし/に/《はる》/たち/ける/日/よめ/る/

たち[] /第 0 1 巻0001 K /ふるとし/に/はる/《たち》/ける/日/よめ/る/

ける[] /第 0 1 巻0001 K /ふるとし/に/はる/たち/《ける》/日/よめ/る/

ひ[日] /第 0 1 巻0001 K /ふるとし/に/はる/たち/ける/《日》/よめ/る/

よめ[] /第 0 1 巻0001 K /ふるとし/に/はる/たち/ける/日/《よめ》/る/

る[] /第 0 1 巻0001 K /ふるとし/に/はる/たち/ける/日/よめ/《る》/

< 以下略 >

[] 内に意味を表わす漢字を記入する。助詞・助動詞は [助] [助動] とする。

ふるとし[旧年] /第 0 1 巻0001 K /《ふるとし》/に/はる/たち/ける/日/よめ/る/

に[助] /第 0 1 巻0001 K /ふるとし/《に》/はる/たち/ける/日/よめ/る/

はる[春] /第 0 1 巻0001 K /ふるとし/に/《はる》/たち/ける/日/よめ/る/

たち[立] /第 0 1 巻0001 K /ふるとし/に/はる/《たち》/ける/日/よめ/る/

< 以下略 >

学生全員のファイル (KASYU4A.TXT、KASYU4B.TXT、.....) を集めて一つのファイル (KASYU4.TXT) にして、これを五十音順にソートする。フリーソフトの SORTF (豊島正之作成) を利用。このソフトは、MS-DOS上で動き、MB単位の巨大ファイルも処理可能。

処理の実例：

A:¥SORTF -J < KASYU4.TXT > KASYU5.TXT

ありはらのもとかた[在原元方] /第01巻0001H /《ありはらのもとかた》/
 いかに[如何] /第19巻1062U /世中/は /《いかに》/くるし/と /おもふらむ /こゝらのひと/に /うら
 み/らるれ/は/
 いは[言] /第01巻0001U /とし/の/うち/に /はる/は/き/に/けり /ひとゝせ/を /こそ/と/や/《いは》/む /
 ことし/と/や/いは/む/
 いは[言] /第01巻0001U /とし/の/うち/に /はる/は/き/に/けり /ひとゝせ/を /こそ/と/や/いは/む /こと
 し/と/や/《いは》/む/

以下略

【第4回：見出し語を整備する】

前回のファイル（KASYU5.TXT）をあらかじめ人数分のファイル（KASYU5A.TXT、
 KASYU5B.TXT、……）に分割しておく。各自、自分の分担分について以下の作業をする。

複数の用例のある語については見出しを一つに統合する。

同音異義語は別見出しとする。

活用語は終止形を親見出しとして立て、各活用形を子見出しとする。

文脈（用例）中のスラッシュを「置換」により除去する。

U・K・Hは「歌」「詞」「人」に置換する。

分割されていたファイル（KASYU5A.TXT、KASYU5B.TXT、……KASYU5M.TXT）を一つに
 統合してKASYU6.TXTとする。

KASYU6.TXTをワープロソフトで加工して見やすくする（特定のワープロの文書となる）《 》
 は、できるなら中の文字をゴシックにし、《 》自体は除去すると見やすくなる（ワープロソフ
 トによっては、「属性置換」により簡単にできる）見出し語もゴシックにすると見やすい。

プリントアウトすれば、「和歌集の文脈つき語彙総索引」の一応の完成である。あとはいわゆ
 る「逆引き」作業を行ってミスをチェックする。

[処理結果の実例]

ありはらのもとかた[在原元方]

第01巻0001人 **ありはらのもとかた**

第19巻1062人 **在原元方**

いかに[如何] 第19巻1062歌 世中は **いかにくるしと** おもふらむ こゝらのひとに うらみらるれは
 いふ[言]

いは【未然】

第01巻0001歌 としのうちに はるはきにけり ひとゝせを こそとやいはむ ことしとやいはむ

第01巻0001歌 としのうちに はるはきにけり ひとゝせを こそとやいはむ ことしとやいはむ

（本ソフトについては、巻末添付のCD-ROMを参照。）

事例6．大学間ネットワーク共同授業（国語学：語彙分析）

1．授業のねらい

黒板・手作業型の授業では実現し得なかった、語彙の計量分析を実習する。具体的には、日常語彙
 を分析することで、辞書に載っていない「意味」の存在や認知差を発見し、日本語・日本文化におけ
 る意味の遠近化と部分体系化の方法を習得していく。と同時に、情報機器の操作に慣れ、プレゼンテ

ーション能力を高める。通年の授業が終わる頃には「語彙の向こう側には文化があり、語彙を多変量解析することで文化類型や認知の実態が見えてくる」というのが、この授業の特長である。

2. シラバス

授業分野：日本語の研究（2年次、通年科目）

前期は、伝統的な語彙論をベースに実践的に理論化していくボトムアップ型の授業を展開し、後期は、実践的に学ぶ。

ここでは、第21回の「語彙分析と体系比較」を例に、授業のイメージを紹介する。

第14回：	比喩と語彙。
第15～17回：	文化的意味。多文化の調査と分析、NHKの全国意識調査との関連性。
第18、19回：	語彙調査の意義と動機づけ30分程度の遠隔授業、素データの入力。
第20～22回：	新しい語彙分析。計量分析の意義とクラスター分析、地獄的意味や歴史的意味などを知る。
第23～25回：	意味の理論化。コンピュータ分析の妥当性と汎用性を探る、サイバースペースと意味論、語彙教育の課題（語形偏重を改める）。
第26回：	まとめ。1年間の授業から得られた知見、コンピュータの支援効果。

第18～20回は、モデル授業に至るための準備作業を行い、遠隔授業、ホームページを利用した多文化調査データの解析を学ぶ。そして、「次元形容詞」を例にして類義語の意味的距離と語彙体系を経験するとともに、辞書に載っていない「意味」の存在と友達の回答との違い・認知差を意識させる。意味関係や語彙体系は、語彙分析表を作っただけでは見えにくいので、学生が自らの操作で体得できるよう動機づける。

3. 授業の内容

ここでは、前3コマの演習を踏まえて、多変量解析による語彙分析と体系比較を行う。分析対象は「あがる、のぼる、おきる、くだる、さがる、おちる、うかぶ、うく、しずむ、いく、くる、とおる」の12語、授業のシナリオは表1の通りである。

[あがる] = 位置や段階や次元が高い方へ移る。全体または部分が高い方へ向かう、価値・資格・程度・勢力・品質などが高まる、極点にまで達する、そのものが高く人目につくようになる、そのものが高位のものに渡される。（『広辞苑』第4版による）

[のぼる] = 順々にたどって高い所へ行く。高い所へ行く、上流へ進む、昔にさかのぼる、京へ行く、貴人の御座近くへ参上する、高い位につく、物の上に置かれる、のぼせる、対策のために出場する。数量がある程度に達する（同）

時間(分)	学習項目	授業内容	教具
00～10	前授業の確認	(1) 当分の学生が前授業のあらましを自分のHP上の資料で報告。 論題は「多変量解析」を学習した。	HP プロジェクター
～05	語彙分析と語彙体系の比較	(2) 教員が補足説明し、今日の授業目的を伝える。 (1) 多変量解析手順を「移動動詞」のプリントで復習する。 (2) 学生が素データを打ちこむ。 (3) 教員が主成分分析とプロット表示。	プリント プロジェクター
～30	文化境界線を越えて	(1) ある大学の日本文化研究室と表参道でつなぎ、神楽坂の地理的分布についての話を聴く。教員のスクリーンに研究所の研究室を映し、学生用モニター画面には神楽坂の分布図を映す。 (2) 言語地図の上に言語境界線と文化境界線を引く。	携帯電話 ビデオ チャット HP メール
～40	授業成果確認	(1) この授業から得られた知見。 (2) 理想的な辞書にはいかなる「意味」が記載されるべきか、レポートをメールで提出。	

表1 第21回授業の教案（語彙分析と体系比較）

辞書の記述でも「意味」の類似と差異は明らかだが、意味の遠近度までは分からない。「2時間かけて船が川を（あがる／のぼる）」では「のぼる」が選択され、「風船が空に舞い（あがる／のぼる）」では「あがる」が正解となるが、その意味論的根拠は何かについて、理由づけを各人が行う。一人で手に負えない語についてはグループの全構成員がチャットで助け合い議論を積み上げる。教員もサポートして、意味特徴が決められていく。

[のぼる] = 行為者 / 対象物 出発点 到着点 上へ 前へ 時間的長さ・期間 手段
ゆっくり 移動する

[あがる] = 行為者 / 対象物 出発点 到着点 上へ 時間的長さ・期間 手段 速く
移動する

この要領で、12語すべての意味特徴をまとめたマトリックスのデータをクラスター分析して、デンドログラムができあがる（図1）。これを見ると、12語のうち「うく」「うかぶ」の意味的距離が最も近く、続いて「さがる」「おちる」となる。

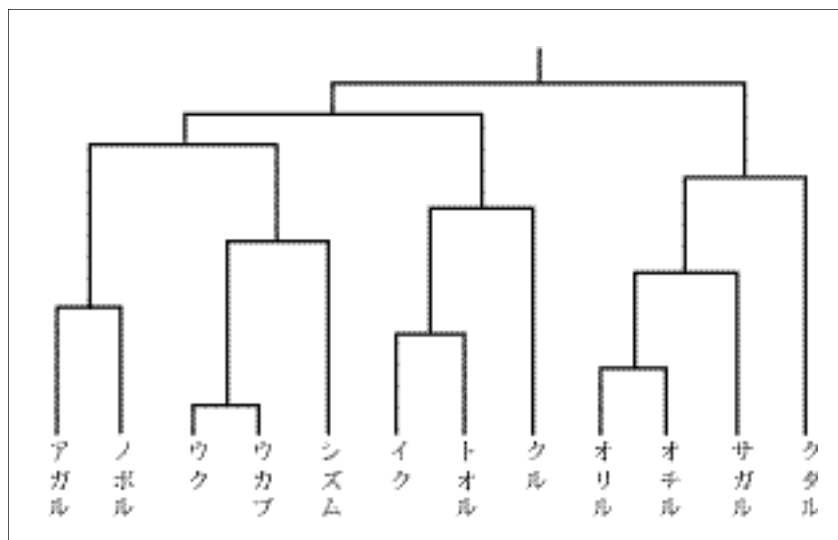


図1 移動動詞群のデンドログラム

移動動詞の分析が済むと、授業は、文化境界線の話へと変わる。これは、この授業での分析法や体系化が特殊な語彙にのみ当てはまるようなものではなく、汎用性があることと、語彙の体系化ができるということは、文化も体系化できることを理解してもらうためである。このため、他の大学の研究室と携帯電話でつなぎ、沖縄や本州の古代神道について精神構造の比較や地理的分布などを話し、学生は自分のパソコン横にあるモニター画面に映された言語境界線を手がかりにして、文化境界線を想定していくことになる。そして、その作業を独力でもスムーズに進められるよう、離れた座席にいる共同メンバーとチャットで意見交換する。

この授業モデルは、第23回以降の「意味の理論化」の伏線にもなっており、大岡信「言葉の力」（視覚で捉える桜）や山川登美子の短歌（聴覚で捉える桜）などへの意味理解を増し、アイマーク軌跡を入れた映像画面を見ることで、自己と他の人間との著しい視線移動差や認知差を実感させられる。これは、意味を構成する意味特徴の束を多変量解析することによって、文化的意味や経験的意味、あるいは民族性・生活環境・性差・性格といった意味要因の隠されていることを知るきっかけになり、ことばと文化との関係の深さを言語文化学の視点から科学的に学習したことによる大きな成果となる。

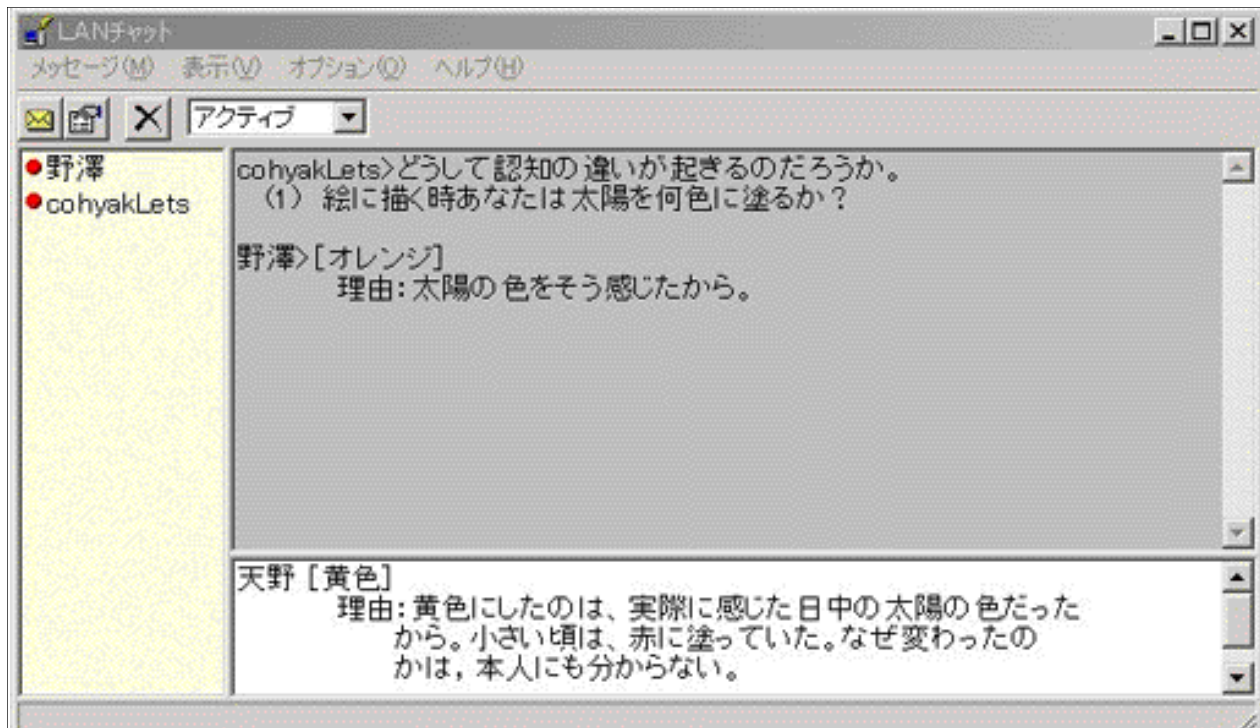


図2 チャットを利用した体系化の作業画面

4. マルチメディア型語彙授業の教育効果

効果は、半期ごとの「授業評価」で客観的に提示され、次年度の授業改善につながる。

チャットなどの利用により、インタラクティブな参加型授業が実現する。

画像・映像の導入で学生が興味をもち、授業に変化がつく。

従来の語彙分析に比べ、単語間の意味的距離や語彙体系の提示が容易になる。

意味の認知差やその要因について、素データから帰納法的に理論化していく科学的思考が、自然に身についていく。